# 国栖

世阿弥作

前

子方　帝

ワキ　供奉の官人

立衆　随行一同

シテ　漁翁

ツレ　老女

狂言　追手の兵

地は　大和

季は　春

後

シテ　蔵王権現

一同一声「思はずも。雲井を出づる春の夜の。月の都の名残かな。

ワキ「道々たらば位山。

一同「登らざらめや唯頼め。

ワキサシ「神風や五十鈴の古き末を受くる。御裳濯川の御流れ。やごとなき御方にておはします。

一同「此君と申すに御譲りとして。天津日嗣を受くべき所に。御伯父何某の連に襲はれ給ひ。都の境も遠



田舎の。馴れぬ山野の草木の露。分け行く道の果までも。行幸と思へば頼もしや。

下歌「身を秋山や世の中の。宇陀の御狩場よそに見て。

上歌「男鹿伏すなる春日山。〳〵。水層ぞまさる春雨の。音は何くぞ吉野川。よしや暫しこそ。花曇りなれ春の夜の。月は雲井に帰るべし。頼みをかけよ玉の輿。〳〵。

ワキ詞「御急ぎ候ふ程に。何処とも知らぬ山中に御着きに

て候。先此所に御座をなされうずるにて候。

シテ詞「姥や見給へ。

ツレ詞「何事にて候ふぞ。

シテ「あの祖父が伏屋の上に。紫雲の棚引いたるを拝まい給うたか。

ツレ「実に〳〵あたりに紫雲棚引き。たゞならぬ空の気色やな。

シテ「あふ唯ならぬ気色候ふよ。昔より天子の御座所に



こそ。紫雲は立つと申せ。もしも不思議に尉が住家に。

ツレ「左様の貴人やおはすらんと。

シテ「舟さし寄せて我屋に帰り。

ツレ「見れば不思議やさればこそ。

シテ「玉の冠直衣の袖。

ツレ「露霜にしをれ給へども。

シテ「さすがまぎれぬ御粧ひ。

地「さもやごとなき御方とは。疑ひもなく白糸の。釣竿をさし置きて。そもや如何なる御事ぞ。かほど賤しき柴の戸の。暫しが程の御座にも。なりける事よいかにせん。あら忝なの御事や。〳〵。

シテ詞「是はそも何と申したる御事にて候ふぞ。

ワキ詞「是はよしある御方にて御座候ふが。間近き人に襲はれ給ひ。是まで御忍びにて候。何事も尉を頼み思し召さるゝとの御事にて候。



シテ「さてはよしある御方にて御座候ふか。幸ひ是は此尉が菴にて候ふ程に。御心安く御休みあらうずるにて候。

ワキ「いかに尉。面目もなき申し事にて候へども。此君二三日が程供御を近づけ給はず候。何にても供御にそなへ候へ。

シテ「其由姥に申さうずるにて候。如何に姥聞いて有るか。此二三日が程供御を近づけ給はず候ふとの御

事なり。何にても供御に奉り給へ。

ツレ「折節是に摘みたる根芹の候。

シテ「それこそ日本一の事。我等もこれに国栖魚の候。是を供御に備へ申さうずるにて候。

ツレ「姥は余りの忝なさに。胸うちさわぎ摘み置ける。根芹洗ひて老が身も。心若菜をそろへつゝ。供御にそなへ奉る。それよりしてぞ三吉野の。菜摘の川と申すなり。



シテ「祖父も色濃き紅葉を林間に焚き。国栖川にて釣りたる鮎を焼き。同じく供御にそなへけり。

地「吉野の国栖といふ事も。此時よりの事とかや。蓴菜の羹鱸魚とても。是にはいかで勝るべき。間近く参れ老人よ。〳〵。

ワキ詞「いかに尉。供御の御残りを尉に賜はれとの御事にて候。

シテ詞「あら有難や候。さらば打ち返して賜はらうずるに

て候。

ワキ「そも打ち返して賜はらうずるとは。何と申したる事にて有るぞ。

シテ「打ち返して賜はらうずると申すこそ。国栖魚のしるしにて候へ。いかに姥。供御の残りを尉に賜はれとの御事にて候ふが。此魚はいまだ生々と見えて候。

ツレ「実に此魚はいまだ生々と見えて候。



シテ「いざ此吉野川に放いて見う。

ツレ「筋なき事な宣ひそ。放いたればとて生きかへるべきかは。

シテ「いやいや昔もさるためしあり。神功皇后新羅を従へ給ひし占方に。玉島川の鮎を釣らせ給ふ。其如く此君も。二度都に還幸ならば。此魚もなどか生きざらんと。

地「岩切る水に放せば。〳〵。さしも早瀬の滝川に。

あれ三吉野や吉瑞を。顕はす魚のおのづから。生きかへる此占方。頼もしく思し召されよ。

ワキ詞「いかに尉。追手がかゝりて候。

シテ詞「此方へ御任せ候へ。いかに姥。あの舟かいて来う。

ツレ「心得申し候。

狂言「シカ〳〵。

シテ「何清み祓へ。清み祓へならば此川下へ行け。

狂言「シカ〳〵。



シテ「さては清見原とは人の名よな。あら聞きなれずの人の名や。其上此山は。都卒の内院にもたとへ。又五台山青龍山とて。唐までも遠く続ける吉野山。隠家多き所なるを。何くまで尋ね給ふべき。速かに帰り給へ。

狂言「シカ〳〵。

シテ「何と舟が怪しいとや。是は乾す舟ぞとよ。

狂言「シカ〳〵。

シテ「何と舟を捜さうとや。猟師の身にては舟を捜されたるも家を捜されたるも同じ事ぞかし。身こそ賤しく思ふとも。此所にては翁もにつくき者ぞかし。孫も有り曽孫もあり。山々谷々の者ども出で合ひて。あの狼藉人を打ち留め候へ打ち留め候へ。

狂言「シカ〳〵。

ツレ「なふ聞し召せ追手の武士は帰りたり。

シテ「今はかうよと祖父姥は。



ツレ「うれしや力を。

シテ「えいや。

二人「えいと。

地「舟引き起し尊体の。〳〵。御恙なく川舟の。かひある御命。たすかり給ふぞ有難き。

クリ地「それ君は舟臣は水。水よく舟を浮ぶとは。此忠勤の喩へなり。

ワキサシ「有難やさしも姿は山賤の。

地「心は高き謀。実に貴賤には依らざりけり。

ワキ「積善の余慶限りなく。

地「流れ絶えせぬ御裳濯川。濁れる世には住みがたし。

子「されば君としてこそ。民をはごくむ習ひなるに。

かへつて助くる志。身は宿善のかひぞなき。

地「身は宿善のかひぞなき。一葉の舟の行末。蟠龍の

雲井終になど。至らざらめや都路に。立ち帰りつゝ

秋津洲の。よしや世の中治まらば。命の恩を報ぜ



んと。綸言肝に銘じつゝ。夫婦の老人は。忝なさ

に泣き居たり。

クセ「さる程に。更けしづまりて物すごし。いかにとし

てか此程の。御心慰め申すべき。しかも所は月雪

の。三吉野なれや花鳥の。色音によりて音楽の。

呂律の調べ琴の音に。峰の松風通ひ来る。天つ乙

女の返す袖。五節の始め是なれや。（楽）

地「乙女子が。〳〵。其唐玉の琴の糸。引かれかなづ

る音楽に。神々も来臨し。勝手八所此山に。木守の御前蔵王とは。

後ジテ「王を蔵すや吉野山。

地「即ち姿を顕はして。即ち姿を顕はし給ひて。天を指す手は。

シテ「胎蔵。

地「地を又指すは。

シテ「金剛宝石の上に立つて。

地「一足を引つ提げ。東西南北十方世界の。虚空に飛行して。普天の下率土の内に。王威をいかでか軽んぜんと。大勢力の力を出だし。国土を改め治むる御代の。天武の聖代かしこき恵み。あらたなりけるためしかな。





底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著